

ナーシングホーム告発小説：*As We Are Now* の一考察

岡田宏子*

A Study of *As We Are Now* as a Novel to Expose a Nursing Home in 1970s

Hiroko OKADA

〈本稿のテーマ〉

本稿は、アメリカの詩人、小説家、メイ・サートン (May Sarton, 1912 ~ 1995) が書いた *As We Are Now* (1973, 邦訳『今、かくあれども』, 1995) を、1970年代のアメリカのナーシングホームの介護の惨状を告発する小説として読み解くささやかな試みである。その焦点は、高齢女性主人公が怒りを核として、如何に主体の確立をするかというプロセスにある¹⁾。小説の語り手、76歳のヒロイン、カーロ・スペンサーはアメリカの草深い田舎のナーシングホームへ余儀なく入所し、非人道的な高齢者介護を受ける羽目に陥いる。自己の尊厳を踏みにじられ、精神的に追い詰められた挙句、自分と他の入所者達の尊い命を犠牲にして、監視人同様の介護者達を汚辱のホームもろとも焼き払う。彼女の最後の自己実現としての火によるホームの浄化が、彼女の異議申し立てであり、遺書としてそれまでの経緯を綴った日記は劣悪なナーシングホーム介護の現状を社会に警告するというプロットである。

サートンは、若い時から老いに関心を持ち、また、レズビアンとしてのカミングアウトが早すぎたために、不当な文学的、社会的な評価に甘んじ、個人的には83歳の高齢まで現役作家として創作活動を続け、一人の人間として最後まで高みを目指して生き、20世紀という時代と共に歩んだ。カーロは、ある意味でサートンの実人生を先取りする人物として造形されたとも言えよう。

〈テーマの解題〉

As We Are Now の検討に入る前に、老い、エイジング、高齢女性の問題をいち早くテーマとしたサートンのこの小説の問題性の位置づけをするために、図式的ではあるが、フェミニズムがどうこれらに取り組んだかを振り返る必要がある。

日本の人口動態は世界の高齢化の最先端をゆき、西欧社会においても急速な人口のグ

* 国際コミュニケーション学部 表現文化学科

レー化が進行している。ボーヴォワール (Simone de Beauvoir, 1908-1986) が早くも 1970 年に『老い』で指摘したように、従来、西欧社会は老いへの嫌悪や不安が強かったので、老いの問題への取り組みは遅く、多くの分野において、人口動態の変化の速度に遅れを取っている²⁾。1960 年代後半から娘達のフェミニズムを推進した女性達も、1990 年代後半には 50 歳を越え始め、或いはそれより年長となって、ジェンダーと老いについて真剣に考慮し始めている³⁾。歴史的には、第二波フェミニズムは、父権制下における女性への性差別を告発したにもかかわらず、女性の負の価値の代表者として、彼女達の母親世代を糾弾し排除して高齢女性差別をフェミニズムの思想に内在させていた。しかし、フェミニスト達自身が母親になった 1980 年代には、母親世代への差別も見直しの機運が高まり、かつてのエイジズムへの反省を深くした感がある。

1970 年代には、女性差別の根源にあった性とジェンダーの区別がほぼ定義されたが、「歳」(エイジ)とは何かが問われはじめたのは、ごく最近、1990 年代あたりからであり、性に対するジェンダーと同じく、高齢あるいは老いが生物学的なものであるというよりは、社会的・文化的構築物であり、さらに高齢女性がジェンダーに加えて老いによる二重差別に抑圧される事実について、真摯な深い追求が進行している⁴⁾。

1993 年にベティー・フリーダが (Betty Friedan, 1921-2006) 大著、『老いの泉』(*The Fountain of Age*) において、従来の老いのパラダイムに大きな変革を唱えた⁵⁾。フリーダは、若者文化一辺倒であった西欧文化批判として、老いの時代こそ最も自由な自己の成長の時代と規程し、高齢者の様々な積極的な社会参加によるポジティブ・エイジングを提唱し、従来の伝統的な老いの定義を変革した。サートンは、フリーダより 20 年も早く、約 40 年前の 1973 年に、*As We Are Now* において、老いと女性であるというジェンダーの二重の十字架の抑圧下、人間としての主体の確立に精一杯闘う高齢のヒロインの内面を書き、アメリカ社会のナーシングホームを告発し現代社会の問題を先取りした点で、高く評価されるべきである。

1970 年代から 80 年代にかけてのイギリスの老人介護についての長編小説が、2007 年に高齢でノーベル賞を受賞したドーリス・レスリング (Doris Lessing, 1919 ~) 作の、*The Diaries of a Good Neighbour* (1984) である。二つの作品に共通するのは、日記形式である。サートンは、介護される側、中産階級の元高校教師、カーロの日記であるが、レスリングの作品は、介護する側である、やはり中産階級の中年女性、雑誌編集者のジャンナによる日記である。レスリングの作品は、階級と世代を超えた女同士の友情による高齢者の自宅介護の模様を書いたものである。アメリカ、イギリスで期せずしてほぼ同じ頃、1970 年代に平均寿命が延びると、特に高齢女性の老後の生活のあり方が問われ、それに呼応するように、二人の作家は、自分より遥かに年上のヒロインを作品の中で造型した。サートンは 61 歳で、カーロという心臓を病む 76 歳の元教師を、レスリングは 65 歳の時に、94 歳の元帽子職人、モードを描いた。カーロはナーシングホームを告発し、モードは自宅住まいに固執して、ナーシングホーム介護を拒否した。二人の作家は、確かに異ったプロット創造したが、物語に通底するのは当時のナーシングホーム介護への否定的な言説であり、高齢女性の個のあり方が真の意味で尊重される老いの生き方とは何かという問いをなげかけ、早くも施設介護のあり方に警鐘を鳴らした。

サリー・チヴァース (Sally Chivers) の疑問の通り、小説における高齢者は、常により若

い世代の作家が描くため、それが真に高齢者の声を表現するのか、また、それは若い世代が見る高齢者の姿ではないかという問題もある⁶⁾。しかし、大人の作家が子供を主人公と児童文学にもそれと同種の問題があり、高齢者と子供という自らを自分の言葉で語り得ない人々の真の語りとは何かという問題は残る。一方、自らの声で語り得ない人々のためにこそ、彼等と同じ目線でその語り得なさを深く汲み取り、言葉を持つ者がナラティブを創造することが、多様な年齢層の人々が共存する社会の到来に近い今、必要なことではないだろうか。

サートンは、まさに当時の自分より年上のカーロに寄り添い、*As We Are Now* において、悪質なナーシングホームという閉鎖的集団における介護者と被害者の権力関係の中で何が起きるかを、被介護者となる高齢女性の1人称のナラティブによって明らかにし、高齢女性が全ったき一人の人間として生きる姿を描き、彼女の作品の読者層をそれまでの中年から若い人々にまで広げた。施設介護批判の本質は、単に40年近く前のアメリカのナーシングホームの問題だけではなく、現在の日本の問題でもある。また、少子高齢社会の中で、社会状況や家族制度の変化により、長い間女性の負担によって行なわれてきた高齢者介護の社会化が、ある必然として日本の社会でも受け入れられ始めた現在、滅多に聞くことがない、介護を受ける側の声を書き綴った日記による *As We Are Now* は、貴重な作品である。勿論、保険制度の問題、国家的な経済の見地など更に大きな枠組みによらなければ、施設介護の様々な問題解決は不可能であるが、第一にそれについての現状認識が必要であろう。サートンの小説から20年後の『老いの泉』（1993）においてさえ、施設介護についての章のタイトルは「ナーシングホームの恐怖」である⁷⁾。サートンがこの問題の共有を、小説の最初に付したエピグラフによって読者に訴えかけたのは、技巧的に卓抜であり、今も意義深い。

〈*As We Are Now* のエピグラフ〉

As We Are Now のタイトルは邦訳では『今、かくあれども』と、一人称複数の主語、「私達は」が省略されて、「いつかはあなた達もこうなるのだ」と、次に続く筈のメッセージを強く暗示する。この小説のエピグラフの原文は、サートンがニューイングランドの墓地で見たであろう墓碑銘の引用であるらしい。

“As you are now, so once was I; /Prepare for death and follow me.”

このように、墓碑銘では、“As” 以下の従属文の主語は、“we” ではなく、“you” である。2人称複数の「あなた達」は、血縁の者であろうとなかろうと、生きて自分の墓の前に立つ人達を指し、墓に眠る死者が語りかける。「今、あなた達が生きているように、私もかつて生きていた。死に備えて私に続くのだ」と。死者はさらに続けて、自分をメメント・モリ (memento mori) として、生ある今から「死を思え」と、そして、人の死が不可避である故に、良い生を送れと諭すのだ。実際、16, 7世紀の英文学におけるメメント・モリの書は、良き死を迎えるために良き生を全うするための指南書であった。

しかし、この小説のタイトルは、墓碑銘の主語“you”を“we”にずらして、この作品は

別のメッセージを含む。ナーシングホーム、「双子ニレの家」に住むカーロも含めての住人達は、本来の自分を失って、唯、生きているだけ。「私達は今こんな状態なのであるように」、いずれ、この小説の読者のあなた達もどこかのひどい施設で同じ辛い晩年を送るかもしれない。小説のタイトルとエピグラフは、その縮図が、「双子ニレの家」であるように、高齢者のナーシングホームにおける悲惨な状況は、アメリカ社会の当時の問題の一つだと人々に強い警告のメッセージを発している。

この小説の大団円をなす、一見、暴力的に終わるカーロの死は逆説的に響くとしても、身を挺してのナーシングホーム告発という意味の自己実現であり、それを完遂させた彼女の良き生の証は、既に述べたように日記として残された。日記文学の形式は、サートンが *As We Are Now* と同年の少し早くに出版した *Journal of Solitude* という彼女の日記文学の最も優れた作品において、ある完成の域に達していた。

〈カーロの終の棲家としての「双子ニレの家」〉

高齢女性の視点から書かれる物語は、病によって自宅に住めなくなる時、どこへ住むかという決心を契機として展開することが多く、それが高齢女性の晩年の人生を複雑に変化させる⁸⁾。*As We Are Now* もまさにそんな物語である。ヒロイン、カーロは二人兄妹であるが、兄も既に80歳。彼の再婚相手はかなり年下の普通の主婦であるジニー。カーロが心臓発作を起こし、自宅での自立生活ができなくなると、妹を家に迎え入れ、同世代介護をする思い遣りのある兄であった。しかし、それは潰える。カーロは、ジニーとの折り合いがつかなかった。カーロは、かつて現役の教師の頃、職場の俗流文化的同僚と一線を画して、頑なに孤高を保った教養の持ち主で、76歳の今も兄との政治談議に再び熱中する。そんな議論からジニーが除け者になることが兄夫婦との生活の失敗の原因であった。

健康上の問題から、他人に依存せずには生活できない単身生活者、カーロの次なる唯一の選択肢は施設介護であった。人間としての自立性や個としての尊厳が保てなくなりがちな劣悪な施設への入所は、社会学者の言う「社会的な死」、或いは「心理学的な死」である⁹⁾。カナダの作家、マーガレット・ローレンス (Margaret Laurence, 1926-1987) 作の *The Stone Angel* のヒロイン、90歳のヘイガーは「銀の糸ホーム」への入所を拒否して家出を敢行する。既に述べた、レッシングの作品においても、94歳の病人のモードは、長年住み慣れたフラットから追い出されないように元気を装った。老いの身には住み慣れた住まいは自らの肉体の一部であり、生きるために重要なのだ。ハイデッガーの言葉のように、住むことはまさに生きることなのである。人間は住処を作りつつ、その住処がその住人を作るものである。

病院の紹介先は、幹線道路から幾重にも小道に入った、脇に楡の木が二本立つ小さな元農家のナーシングホームである。自宅を手放し、兄の家からスーツケース二つの身となった、まさに漂泊の人、カーロを、兄夫婦が「双子ニレの家」へ送り届けたのは、土砂降りの雨の6月のある日であった。何年もの間に徐々に泥の中に埋まったような小さな元農家は「その場所全体が、暗闇の中に閉じ込められているようだった。」 (“...the whole place seemed enclosed in darkness.” p. 11.) 「箱舟を作りたくなるほどの土砂降り」(訳, p. 5) というノアの箱舟を想起する激しい雨は、文字通りの天候の雨であり、比喩的には、カーロ

のこれからの厳しいナーシングホーム生活の予徴であった。彼女は、ナーシングホームとは名ばかりのまさに暗闇にも等しい「双子ニレの家」へ、外部世界から隔離されて閉じ込められた。

I am in a concentration camp for the old, a place where people dump their parents or relatives exactly as though it were an ash can. (p. 9.)

「私は老人の強制収容所にいる。ひとが、親や身内をがらくたのように捨ててゆくごみ溜めにいる。」(訳, p. 3.)

ホロコーストを想起する「強制収容所」という強烈な言葉と、「ごみ溜め」という安易に日常的な不用品を捨てる不潔な容器をあらわす二つの言葉の並置は、棄老の場所であるというナーシングホームの本質を端的に抉り出す。カーロにとってはこのホームは、「懲罰を与える場所」(“a place of punishment”, p. 10) にほかならない。事前の調査も情報もなく、兄夫婦からも、カーロの元住んでいた町からも遥か遠い「双子ニレの家」。せめてもの救いは、カーロが個室に入ったことであった。

彼女を置いてゆく兄、ジョンが、雨の暗い中、惨めなナーシングホームに着いたとを知らせる声は、「子供や知恵遅れの人間に話しかけるときのように……不自然に快活に聞こえた」のであった(訳, pp. 5-6)。予想もしなかった「双子ニレの家」の惨状に受けている妹のショックを無視して、慰めるどころか快活に話す兄。妹をここへ入れて、妻ジニーと妹との確執の重荷を下ろし、家庭破壊の恐れがなくなる安堵で、彼の声は明るくなったのでもあった。

〈「双子ニレの家」の施設介護〉

埃が積もり、尿の臭いが鼻に付く不潔な「双子ニレの家」の住人は、彼女以外は14人の元農夫の男性である。個室に入っているスタンディッシュ・フrintを除いては、皆大部屋に入っていた。ここにおいても、兄の家においてと同様な、出身階級、教育・文化程度において、カーロは異質の存在であった。元ブルーカラーの男性達の中に、女性のホワイトカラーがたった一人。

同じ人間関係は、カーロとこのホームの経営者兼介護者、ハリエット・ハットフィールドと娘ローズとの間にもあった。ジニーは、ハリエットが看護師の資格があると紹介したが、それは偽りであった。恐ろしいほど太った体格の二人は、元農夫の男達と変わらない粗野な人間であった。ハリエット母娘は、教養があり上品なカーロを、名前で呼ばず、“Miss Spencer”、「スペンサーさん」と皮肉たっぷりに、苗字に「さん」付けて呼びかけ、二人がカーロを支配する関係は、カーロへの露骨な階級的憎悪の念から始まった。二人は、他の高齢の男達を、彼女達のセクシュアリティによって巧みに支配していた。彼女達がベッドメイキングする時に、二人の巨大な胸を見て、介護される男達が卑猥なコノテーションで目配せをしあうことを許していた。しかし、介護者と被介護者の間には、非介護者の側に介護者への依存関係があるため、平等な関係はあり得ない。ハリエット母娘は、介護者として、非介護者の住人達に絶対の支配権を振るっていた。

不誠実な偽善者、ハリエットの人格には表裏があり、尻尾を捕まれないように巧みに立ち回る。住人の親族が見舞いに来ると、ほんの二、三分前には手荒くオムツを替えていたのに、親族の前では打って変わった優しい声で同じ老人に話しかけて、彼女は芝居を演じる。その時ばかりは彼女は偽りの同情心の塊だ。見舞いの訪問者に、「私達があの人達の面倒を見てやっているのよ、かわいそうな人達」と、言っているのをカーロは聞いていた。住人達は、まるで車から動物でも捨てるように、家族からここに置き去りにされている「あの人達」なのだ。

“Imagine,” I [Caro] have heard her [Harriet] say, “we take them in, poor things.”
(We are talked about always as “them,” as if we were abandoned animals thrown out of a car.) (p. 16)

二人の介護者にとって、彼女達の老いた被介護者達は個々の人間ではなく、「あの人達」と一まとめに括られている。介護人の側は「私達」、被介護人達を「あの人達」と分けるこの二分法は、当時のアメリカのナーシングホームの多くに公然と存在した支配と被支配の権力構造であり、その縮図を「双子ニレの家」は体現していたのだ。

「あの人達の家族はあの人達をここへ連れてくるだけで、それっきり来ないこともあるんですよ」とハリエットが言えば、残酷な棄老の事実に見舞いの親族はショックを受け、彼女の行為を礼賛する。しかし、老人の介護を彼女達に押し付けている負い目やホームの暗い雰囲気から、外部の明るい世界から来た家族は居たたまれなくなって、短時間で去ってしまう。片田舎の世間から隔絶したホームは、このようにたまの訪問者をも締め出す完全な閉塞空間であった。こんな場所では、絶対的な権力者である一人の人間を悪人に墮落させないことはないカーロは考える。彼女は、二人の過重な労働を差し引いても、ハリエットが、この場にいるからこんな人間になったのだらうと、人間が如何にその仕事の間から人格荒廃を引き起こすかを見抜いている。

I wonder whether a person who has complete power over others does not always become wicked. I try to separate what Harriet has become from what she may have been ten years ago. (p. 17)

顔には、人の生活歴が刻まれる。ハリエットの顔は「小さな青い目と卑しい小さな口の欲張りな太った豚」。しかし、10年前は恐らく違っていたのではと。「二本のニレの家」の元農夫の老人達は、多くが社会福祉によって生活しているので、限られた経済規模で、ハリエット母娘が過酷な労働をするしかない。ナーシングホームの低い経済性が、質の低い介護を生み、被介護者は閉鎖空間の中で人間としての自立性と尊厳を失い、外部世界へ出る時は死によってであるという恐ろしい悪循環を生んでいた。

このような場所で、カーロが個室に入ったことはせめてもの幸いであったが、ドアに鍵がかけられず、完全なプライベートは、唯一箇所、鍵がかかるバスルームのみで保障される。カーロが人に見られず泣けたのは、普通の家屋でいえば周縁的な場所であるバスルームであった。パノプティコンさながらに、住人は不可視の介護人達に常時監視され、

まさに生活は監獄における監禁に等しかった。カーロは、兄が初めて見舞いに来た時も、ドアの近くで立ち聞きする介護人達の気配に思いを伝えることはできなかった。

「双子ニレの家」では、多くの住人達は鎮静剤を飲まされ、一日ぼうっとしてテレビの前へおかれ、テレビ画面への少しの間の集中力さえも失せて、従順な動物のように飼いならされていた。ハリエットに完全に支配されている彼等。その上、「一望監視」は、フーコーが指摘したように、監視される者の心に自己を監視する目を植え付け、権力への盲目的な服従に彼等を導いていた。このような彼等はカーロの反面教師でしかない。この非人間的な監禁状態に抗って密かな抵抗を試みているのは、元農夫であるが、他の大部屋の者達より少し裕福で、カーロと同様個室に入っているスタンディッシュ・フrintのみであった。彼は末期癌の患者であるが、家族の事情で医療体制のない「双子ニレの家」に入っていた。痛みを苦しみつつ、体が自由に動かない彼は、鎮静剤をカーロにトイレに捨てさせ、食事をゴミ箱に捨てて、消極的な餓死自殺をはかっていた。肉体的な痛みにも負けない彼に、個室は、一個の人間としての尊厳を保たせていた。そして、カーロの人となりを見抜けるのも、彼一人。しかし、彼は耳が遠く、会話による意志の疎通はできない。紛失した彼の眼鏡は補充されず、書いたメモによる意志の疎通もはかれぬ。目配せや微笑を交わすことでカーロとスタンディッシュはお互いに理解しあっていた¹⁰⁾。

〈日記による主体の確立：我は書く、故に我在り。〉

ストーリーの冒頭は、搾り出すようなカーロの心の叫びから始まっている。「私は狂気ではない。歳とっただけだ。」(訳, p. 3)

I am not mad, only old. (p. 9)

この一文は、日本語の訳書では原作とは違い、独立した一行として印字されて、この訴えの重要性が強調されている。これは、老いイコール衰退と耄碌、故に老人は正常な人間ではないという老いへの根強い偏見への反論の表明であり、彼女が日記に書いた最初の文章が上記の引用であることで「双子ニレの家」へ入ったカーロの精神的打撃の大きさが示されている。これを書く目的は、自分に「勇気を与えるため」であり、その勇気の内容とは、カーロが「双子ニレの家」へ入って後、二週間もかかってやっと日記用のノートとペンを手に入れたことだ。ノートの入手に二週間もかかる個人を無視した生活に突入した76歳のカーロが日記を綴る行為は、自己を決然と保つためと高齢者を見下したハリエット達の支配への異議申し立てである。

一人称で語られる日記は、その直接性により訴える力が切実で、読者との距離は近く、メッセージが強く伝わる文学形式である。サートンは、*Journal of Solitude* という日記文学の傑作を皮切りに、最晩年の83歳まで、孤独を自分のテーマとして日記を出版した熟達の稀有なる日記作者である。As We Are Now は、日付の無い、長さが違う40篇の断片的な日記をスペースの空白で区切る構成をもっている。各日記を切り離し、かつ繋ぐかのように配されたスペースは空間的に無であることにより、言葉に対しての沈黙であるが、同時に時間の経過を示す。また、恰も時間の意識が無用になってしまう、この世の日常性が

ら隔絶した場所としての「双子ニレの家」と、ヒロインの日常的時間からのある種の離脱の表象としても解釈できるのではないだろうか¹¹⁾。

自分の激しい感情の起伏を、センチメンタルな要素を除いて突き放し、対象から一定の距離をおいた、乾いた日記のスタイルは、「双子ニレの家」におけるカーロのある種の闘いである主体の確立の始まりを記す。「双子ニレの家」へカーロが着いた土砂降りの雨の日から、翌年の1月、雪が降りしきる深夜の火事の計画まで、カーロは自分がどこにいるかを、日記を書くことによって認識し、あらゆることを精神の中で明晰しておくために、書くことを自分に強制して日記を綴る。

彼女は、劣悪な一望監視のナーシングホームにおいて、他者の視線に晒され、生活上で他人への依存があったとしても自己を決して、監視人的な介護者の支配下に置くままにはせず、飽くまで主体を貫こうとする。年老いれば必然の記憶の減退には、日記を書くことで対処するのだ。忘れた時はそれを読めば良い。カーロは日記を、自ら“*The Book of the Dead*”，「死者の書」と命名する。書き終わる頃には、自分が死んでいるだろうから。死というゴールを疑うことのない生の一部として深く捉え、日記に綴る内容の吟味は、まるで「偉大な最後の旅路へでかける支度をしているかのような」行為であった。（“...as if were preparing for a great final journey.” p. 10.）

ささやかな日記帳とペンが、彼女の揺るぎない主体を保つツールであるが、それから紡ぎ出されるものは、日記の題名通り、重く激しい苦悩である。日記を書く営みは、自分の主体を全きものとして確立するために、自分の内面や過去へ向かい、自分自身の世界の地図を作る作業であり、それを行う所は、「双子ニレの家」という地獄においてであった。

I tend to make myself whole here in this Hell. It is the thing that is set before me to do so. So, in this way, this path inward and back into the past like a map, a map of my world. If I can draw it accurately, I shall know where I am. (Loc. cit.)

壁に絵も一枚も無い、薄汚れた部屋、排泄物の臭気の漂う不潔な建物の殺伐たる日常。まさに閉ざされた地獄においても、老いの女性カーロは孤独に耐え、一人の人間として生きるために日記を書き続ける。彼女より長くここに居ながら、まともな主体を保つ唯一の人間、プリントとカーロの話に聞き耳を立てているハリエツト達。プリントは何度も、「こんな風に人生が終わるとは、思っても見なかった」とカーロに囁いていた。“I never thought it would end like this.” (p. 18.) 彼の深い無念に、予想だにしないほど長生きをしている現在の老いの人々は、どんな境遇にあれ少なからず共感するのではないだろうか。カーロもこの言葉に彼の心の中に潜むナーシングホームからの逃避願望を読み取るが、実際的な手段は死である現実を知っている。

彼女はこのホームに入って間もなくは、希望を捨ててはいなかった。この絶えざる希望は、サートンの文学の真髄を表し、バーバラ・フレイ・ワックスマン (Barbara Frey Waxman) が青春文学 (Bildungsroman) のアナロジーから、高齢者文学という新しいジャンルをライフングスロマン (Reifungsroman) と命名するに至った、次の一節に表されている。希望は鋭い洞察を示す死生観と深く繋がっている¹²⁾。

And I have the belief that we make our deaths, that we ripen toward death, and only when the fruit is ripe may it drop. (p. 19)

「人間は一人一人が自分の死を創る。死に向かって熟してゆき、果実が熟した時に初めて落ちることが許される、というのが私の信念だ。」(訳, p. 14.)

人は死に向かって衰退して、敗北して死するのではない。人間も自然の植物と同じく、死に向かって果実のように徐々に熟れて豊に実り、時期が来れば果実が自然に枝から落ちるように、朽ちることが死であるのだ。人は熟れる時期が各々異なり、一人一人が成熟にむかって自己の生を創るのだ。生死が人間の様々な先端技術で操作される現代において、人生の自然な時間の経過における個々人の主体的な営為に重きをおく老年観や死生観は、この物語のプロットにおいて重要な意義をもつ。孤独な生活の中で文学の創造活動の傍ら、自然の移り変わりを日々繊細な目で観察し、自らの手で庭作りを行ない、自己の高みに到達しようとしたサートンならではの死生観がカーロの日記と重なりつつも、人為的にこの成熟のプロセスを止める、この小説の壮絶な最後は、ドラマティックに際立ってくる。

生死について深い思いをめぐらすカーロも、激しい環境の変化に心をすり減らし、4週間後に兄夫婦が見舞った時には張り詰めていた緊張が切れ、取り乱して幼児のように大泣きをして、連れて帰ってほしいと懇願してしまう。未だ兄に一縷の救いの望みを抱いていたのだ。兄の口からは励ましの言葉も出ず、兄夫婦は自分達が彼女をこのホームへ入れた自責の念に耐えられず、15分で逃げ帰った。棄老の行為に心痛まない者はいない。しかし、彼等は医師から心臓病のために禁煙を命じられた彼女に、毒同然のタバコを一カートン置いて行く。カーロはこの時、自分が親族の「不可触賤民」に転落したことを明確に知る。サートンの短いノヴェラには、短いからこそ様々な複線が巧みに仕掛けてあり、この心無い見舞い品のタバコは、カーロの最後の自己実現の放火に大切な手段をもたらす小物としてここで登場する。

余りの衝撃に、時間の意識さえ失うのではと案じたカーロは、かつて20年も続いた英国人、アレックスとの不倫の恋の思い出のブラウスを着て自分を鏡に映すと、自らの鏡像に前と違った変化を見つけ、施設介護の中で進む自分の老いに気づく。鏡の中の自己イメージの確認は、高齢者女性がヒロインである小説の常套である。このように自分をも、突き放して客観的に眺めるカーロの眼差しは、彼女の人間としての強さを培い、自己確立を確かなものにしてている。飽くまで自己の主体としての本質の核へ迫りたいカーロの意志は強固である。

I am interested in me. I am a long way still from ... the total self-understanding that I long for now I want to get right down to the core balance it all up into a tidy whole. (p. 24.)

〈怒りによる主体の確立〉

心許す友スタンディッシュとはいえ、彼の猥雑な悪態やセクシュアルな妄想への逃避はカーロには受け入れ難い。しかし、彼は、他の屠所に引かれる羊の如く、鎮静剤でハリエットに支配されていた男達とは違っていた。営々と労働し、成功した部類に入るとしても、妻の病気などで経済的に苦しい老後をこのホームで送る運命を呪詛する、不条理への怒りを彼は常に燃やし、その怒りが彼を生かしているようにカーロには見える。“He is too angry most of the time to be sorry for himself. Anger keeps him alive.” (p. 25) カーロが孤高の固持に拘るように、彼の消えることのない怒りの火は心深く埋められており (“a deep, buried fire of anger that never goes out” *Loc. cit.*), その怒りから彼は食事を拒否していたのだ。

彼の怒りと絶望をカーロが共有したのは、兄達の訪問で混乱状態に陥り、ハリエットに自分の醜態を晒した時だった。兄夫婦へのお為ごかしのハリエットの言葉にも、カーロは強い怒りと絶望を覚えた。そんな時の唯一の救いはスタンディッシュだった。彼は、血を分ける家族でさえ、自分が本当に必要な時には助けにならないとカーロを論ず。彼は、既にそんな身内の頼り無さが骨身に沁みているのだ。スタンディッシュはカーロを哀れむ余りに、彼女の顔さえ見られない。世の中で一人ぼっちになったカーロの悲しみは、感情表現として書かれずに、日記にはただ、後でハリエットがくれた沈静剤をカーロは服用すると記すのみである。彼女は、肉親への未練を断ち切って、このホームが終の住処だと認識する通過儀式として一度は必要な深い絶望に沈潜したのであった。こんな時も、乾いた日記の直截な文体は、自己確立への内面でのカーロの葛藤をいよいよ鮮明に浮かび上がらせる。介護人は、被介護者から見れば、「彼等」である。カーロは絶望の時も自分を励ます。哀しみの極みの時も、“Don't let them steal your mind.” (「彼等に自分の心を盗まれるな。’)と。その思いの切実さは、この一文のイタリック体による強調が語る。孤独の中で自己を保つ道はかくも険しい。

そんな悲しみを癒そうと早朝に詩集を読んだだけで、ハリエットに電気代の節約をと小言を言われる時、カーロは最も恐れていた、あのスタンディッシュと同じ怒りがこみ上げる自分の心境に気づき、自分の制御ができなくなる時がひどく恐ろしくなる。押さえきれい程にまで火が少しずつ燃え広がったら……

That is what I most fear---the anger that Standish also feels, as it burns its way, little by little, to where it cannot be controlled. (p. 34.)

自らの心に鎮まり耐えよというほかは無い。外部からの救いへの希望がなくなり、人里離れたこのホームが拠って立つ場所となると、他人へは説明不可能なこの絶対的な孤立の中で、カーロは正気を保つために逆境に耐えようとする。昔の教え子の一人から来た手紙への、投函されることの無いかもしれない返事にカーロは、「彼等」に洗脳されないで、自分を保つことが、唯一「彼等」の裏をかく方法だと書いて、孤独に負けずに自身の主体の確立のために真剣に闘う決意を表明していた。

スタンディッシュの痛みが悪化し、ハリエットに医者を呼ぶように懇願するが、彼女は

彼の願いに応じるどころか、彼の苦しみは、薬も飲まないし、食べなかった彼の自業自得だと答えるので、カーロの我慢は限界に達し、強い怒りを爆発させた。ハリエットを罵倒し、彼女を目掛けて椅子を投げ飛ばして壊してしまう大立ち回りを演じた。椅子は彼女に当たらなかったものの、ハリエットはお仕置きとして彼女を窓の無い暗い部屋へ何日も監禁するという虐待をした。どれ位の日数がたったか、暗い部屋から出されたカーロの手をスタンディッシュは涙ながらに握り締めるが、彼の手の力は弱い。苦痛に耐えつつも、そうして感謝の念を表す彼に、彼女は威厳を感じお互いの信頼は強くなった。

カーロは、かつて高校教師をしていた時も、不当に解雇されそうな同僚の終身雇用権を確保するために怒りの火を燃やしたことを思い出す。社会的な悪に立ち向かうカーロの怒りには、頑固な怒り（“unregenerate anger”）と聖なる怒りの火とが（“sacred fire”）両方あるのだ。過去を振り返って自己分析をすると、人は単なる優しさだけで、不正義に立ち向かうわけではない。今や、怒りは、カーロの主体を構築する原動力になっていた。それを支えるのが、今は自分の心と語り合う場としての日記を綴ることであった。介護人達は、カーロに彼女が正気ではないと思いきや、彼女は書いた日記を読み返す努力を絶えず怠ることはなかった。書くためには努力を要するが、書く満足もあり、自分の外部である書いたものを読むことによって自己の存在を確認し、自分が正気であることが理解できるのだ。

It [writing] is outside me and because I can see it and read it outside my mind, I know that I exist and am still sane. (p. 46.)

スタンディッシュに諭されて、カーロが肉親との関係の酷薄さに気付いてから、兄とその妻の見舞いは彼女にとって殆ど意味はなくなった。しかし、ローズの予告通り、メソディスト派の40代の牧師、ソーンヒルの訪問という思いもかけない外部世界の到来が「双子ニレの家」に生じる。牧師自身が、「この10月の素晴らしい天気の日」と語りかけたことから、この時、既に季節は秋になっていた。スタンディッシュは神無きこのナーシングホームで、牧師から「神の祝福がありますように」（訳、p. 58）と言われると、突然、いつもの彼の激怒にかられ、罵詈の言葉を吐いたと思いきや、家族から遠く離れて一人死ぬ運命を悲しみ、搾り出すような声でソーンヒル師の前で嗚咽して、スペンサーさんに会ってほしいと牧師に頼んでいた。難聴の彼には、語ることはできないのだ。

ソーンヒル牧師は、カーロのめがねにかなう感じの良い比較的若い人格者であった。何よりもスタンディッシュを本気で救う気持があることがわかり、彼女は彼に心を開く。聞き耳を立てるハリエットを牧師の権限でドアを閉めて締め出す彼の勇気が、彼を信頼するきっかけであった。カーロは、自分の経歴や身の上、希望よりも絶望を学ぶこのホームでの暮らしを彼に語り、そんな会話や別れ際の彼の微笑みが、彼女をおおいに励ますものとなった。それは普通の世界では、極くありふれた普通のことに過ぎないが。

次に、彼の娘のリサがカーロを訪問し、「双子ニレの家」と外部世界へ繋がる道筋ができる。高校の最終学年と言う若い世代と76歳のカーロの友情は、リサの母が庭でつんだ花束からはじまり、続いて昔カーロのために働いた懐かしいエヴァを連れてくるなど、カーロに東の間の幸せを運んでくる。介護の閉鎖空間、「双子ニレの家」は、外の世界からの清

新たな風を必要としていた。一方、弱りきったスタンディッシュの末期は放っておかれるだけであった。

唯一の友を失うカーロの悲しみを大きくしたのは、突然、州の医療調査官が訪れて、ホームを調査した後、スタンディッシュを救急車で病院へ運んだことであった。結局、彼が常々言っていた「こんなふうには終わるとは思わなかった」という言葉どおり、救急車の中で見知らぬ人に囲まれて独りで亡くなった。カーロは、傍にいてやれず彼が孤独で死んだことを深く悼む。州の調査員が調査に入ったのは、ソーンヒル牧師にカーロが告げ口をしたからだハリエット達は信じ、コーヒーに砂糖の代わりに塩を付けるなど、彼女への嫌がらせはエスカレートする。このように露骨に表れる絶対的な権力を持つ腐敗した介護者とそれに支配される無力な被介護者の権力関係に、カーロの怒りと絶望は深まる。しかし、彼女を正気に保ち、粗野な権力者に飼いならされないための武器はその怒りであった。

I hold myself together with anger, and perhaps also with a sense of being an outsider and wishing to remain so. (p. 75.)

老齢にある者の怒りは、全き人間の感情ではなく、衰退の印だと残酷にも老齢者を貶める、世に流通するステレオタイプの解釈に疑問を呈している。

「私の怒りは、私が老齢であるばかりに、弱気とか毫碌のしるしとみなされる。これは残酷なことではないか？ 老人は正当な怒りさえ奪われなくてはならぬのだろうか。怒りっぱささえも「症候」として扱われなくてはならないのか？」(訳, p. 90)

世間が老人に期待する平静さは、老人に着用を期待するマスクに過ぎないと、偏見に満ちた高齢世代へ押し付けられている役割に異議を申し立てて、老人世代も、他の世代と同じように、それぞれが個々別々の個であると指摘している。“We [old men] have nothing in common. Why pretend that we do?” (p. 82.) お互いに違う人間であれば、老人が皆同じだという振りをする必要はどこにもないと、カーロは個としての高齢者の自己を主張する。

カーロも一連の事件で消耗したが、ハリエットの疲労も重なったらしく、10歳も年下の恋人とフロリダへ休暇を取りに行った。二週間だけ、彼女の替わりにやってきたのが、近くの農夫の年配の妻、アンナ・クロースであった。神の存在しないこのナーシングホームという認識は、スタンディッシュのものであったが、奇跡的にアンナはその名のクロース(Close)の通り、神に近い温かい人柄であった。天使のような彼女が、『ピーター・ラビット』に出てきそうな人物のように、白とブルーのチェックのドレスに白い清潔なエプロン姿で見ると、「強制収容所」であった「双子ニレの家」の雰囲気全体は一変する。今までにないほど清潔に掃除され磨き上げられたホーム。朝食のお盆には、プラスチックのマットの代わりに、ピンクの布のマット敷かれ、ピンクの一輪のバラを活けた小さなグラスが添えてあった。

天国から使わされた看護師のようなアンナに、いつも受身で生気の無かった他の住人達からも笑い声がおこる。彼女の手早い仕事、清潔感や美への感受性や思い遣りは、粗野で荒々しい介護者のハリエットと全く反対の極にある。アンナは、ハリエットと違い、カー

口には敬愛の念で接し、このホームに居るべき人物ではない別の種類の人であることをすぐに見抜く。カーロの話し相手として短時間でも割くなど、心のケアも自然に行なう。アンナは「双子ニレの家」へ清潔、美しさ、思い遣り、温かさをもたらし、カーロとの間にも友情が育まれる。カーロはこのナーシングホームへ来て以来、初めて「生きていると感じている」（訳、p. 94）。親切な心と想像力のあるケアをする存在があれば、カーロの怒りは収まり、狂気へ陥る不安もなくなる。“I know that I can still respond to life in a normal human way. I am not disintegrating into madness.” (p. 84.)

〈主体の自己実現としての放火計画〉

アンナの介護はハリエット不在の時だけ。カーロは、この時の快適さを癌患者の寛解期のたとえる。彼女は、絶望と衰えからの寛解期を与えられたと感じ、自己の主体としての将来への不安から、この時期を最大限に生かして、今後の生きる方針を立てようとする。その時に一族の異端者で自由奔放に生きたレズビアン伯母、博士号をとって大学で教鞭をとり「自分自身であること」の重要性を彼女に説いたイザベラの記憶が蘇える。伯母の破天荒な行動力の思い出はカーロを励ますことになる。

ソーンヒル牧師と話すにつれて、彼女は次第に彼に親しみをもつ。スタンディッシュの孤独な死のエピソードからハリエットに憎まれるカーロには、この閉じられた世界では何一つ変わらないとしか思えず、茫然自失の心境に陥っていた。しかし、牧師は「そうとはかぎりませんよ」とカーロに答え、娘のリサをきつとここへ入り込ませると約束したのだ。この時の会話からスタンディッシュを失った深い悲しみが蘇えり、カーロは自分を取り戻し、一瞬の閃きで自分のなすべきことを悟る。牧師には告げずにいるが、それは彼女自身が驚きで圧倒されるような計画、つまり「二本のニレの家」を炎上させて、この閉塞的で非人間的な世界を開くことであった。他の住人も、臭気や便器や惚けで死ぬよりは火による死の方がずっとましだと考えたのだ。彼は、その計画遂行まで、正気を保つ心の軌跡を記すべきノートを5冊も置いていってくれた。

「二本のニレの家」へハリエットが帰り、アンナが去った。どんなに劣悪な建物でも、ケアをする人物により安らかな場所になることをアンナは証明した。カーロは、ある時アンナに宛てて書いた手紙や日記を開けたままにしたため、ハリエットにそれを読まれてしまう。個室のプライベートを侵すことはおろか、人の心の内面へも入り込んで、カーロがアンナに感じた親しみや愛に、いやらしい老女と罵る。ハリエットの解釈では、歳をとったカーロのアンナへの愛は厭うべきもので、良妻賢母、孫もいる祖母である立派なアンナを汚すと言う。嫌らしい手紙をアンナに出すなら、病院へ入れてしまうと、ハリエットがカーロを脅す。

ハリエットは高齢の男達のセクシュアリティを認め、それを利用して彼等を安易に扱っているのに、女性の高齢者、カーロには女性同士の心の通い合いをすら貶めて、高齢女性への偏見に満ちている。手紙や日記を盗み読みして、精神まで素手で掴んで、カーロの唯一の生き甲斐となったアンナへの純粋な思いも侮辱し踏みにじった。カーロは耐えかねてホームから出て行くが、ハリエットと彼女の愛人に連れ戻されて、罰として再びあの暗い部屋へ閉じ込められる虐待に合う。ハリエットに、一番大切な自分の拠り所である愛

を貶められ、再び酷い虐待を受けると、カーロはついに制御不可能な激しい怒りが心に燃えていることに気づく。もう自分には、あのスタンディッシュが怒りの果てに行なった食べ物の拒否という消極的な自殺か、さらに激しい暴力的な行為のどちらかを選ぶしかないことに。

暗い部屋から出されて、兄夫婦のいるフロリダからの葉書を渡される。彼等からの「愛をこめて」という言葉は空疎に響くどころか、生きている限り愛などとは口に出したくもないし、聞きたくもないと思うまでにカーロの心引き裂かれていた。強固な抑圧が人を限界まで痛めつけると、抗議の意思表示の手段は暴力のみであることに思い至り、当時の黒人暴動にも心から共感する。絶望のどん底へ突き落とされると、人間らしい感情は薄れていく。カーロが待ち望んでいた筈のエヴァの「二本のニレの家」訪問をリサが実現してくれたが、エヴァは余りにやつれ果て、かつての面影を失ったカーロに会って、かける言葉もない。しかし、彼女は何が起きているか薄々理解して、カーロよりはエヴァの方が止めようも無く泣くばかりであった。一方、現在のカーロは涙も枯れて、あの計画を実行に移す強さが自分に残っているかどうか気が掛かりであった。

皮肉にも兄達が持ってきたカーロの健康に悪いタバコのおかげで、ソーンヒル牧師の娘、リサから好意でライター用の液体の大きな缶を手に入れてためておき、スカーフで隠して机の引き出しに入れてあった。希望を失って生きる意味の見出せない極地にあるカーロが自己を失わないためになすべき目的は、ハリエット達への怒りを遥かに越えて、正気を失わないうちに「二本のニレの家」ごと彼女達も自分をも焼き払うことであった。世間と隔絶した場所に居るカーロには、兄夫婦の見舞いのタバコも、最も親しく敬愛するソーンヒル牧師父娘の好意をも、目的遂行の手段に利用する以外に武器はなかった。恐ろしい願いを果たすためには、表面上は、自分を受身に弱々しく見せていなければならなかった。“I am kept alive only for one purpose, to end things here while I am still sane enough to do it.” (p. 111.)

しかし、カーロの不倶戴天の決意を翻す危険性は、あの素晴らしい善意の牧師、リチャードに会うことであった。彼はカーロの決心を鈍らせるかもしれなかったから。彼はまた、「死者の書」と命名された日記、一種の遺書であるとカーロが定義する三冊のノートを託すべき人であり、彼に日記を渡す時期を考えていた。日記が出版されるならば、それは「二本のニレの家」へのプロテストの書として、心身を病む人々、あるいは高齢者達や棄てられた人々など、社会的弱者達に関わる福祉施設で働く人々の役立つことを期待していた。不当な介護者への制裁の怒りが原動力であった、最後の自己実現としての放火は、飽く事なき自己確立への欲求であると同時に、同じ苦しみを持つ人々への救済を目指す強く社会性を帯びた行動でもあったのだ。

Perhaps if this story of despair could be published it would help those who deal with people like me, the sick in health or mind, or the just plain old and abandoned. (p. 112.)

牧師が再び訪問しても、日記は渡さない。彼の手へ渡れば、カーロは自分を確認する最後の砦ともいうべき文書を失ってしまうから。ハリエットが休暇から帰ってからは、介護

人同士の雰囲気が悪くなる。ローズがアンナの高いレベルの介護を許したという理由で、ローズは母の不興を買っていた。住人達も落ち着かない不穏なこのホーム。カーロも怒りを抑制できないでいる。思えば、「このホームが稲妻の一撃に打たれたら、どんなに凄惨なことか、神の御業なのだから」とこの場所の破壊的な壊滅への願いだけに収斂して行く。

しかし、その強い思いも、二度目の暗い部屋への監禁後のショックから、カーロの意識が定かならぬ状況に揺らぎ、あれほどのホームの焼打ち計画も、ライターの液がお守りとなってしまう方向に流れそうであった。ところが、感謝祭の翌日、ろうそくつきの感謝祭の花輪のプレゼントを持って、リサが訪問してくれた。ろうそくは、マッチやライター用の液体と共に、カーロの計画に役に立つ。このことに気づくと、放心状態のカーロは初心に立ち返る。リサがカーロを楽しませようとする心が、頓挫しかけたカーロの恐ろしい計画を促すことになった。アンナの農家への最後の別れのような訪問も、そうとは知らないリサの肝いりであったが、かつてのカーロではなく、二人のぎこちない時は沈黙で過ぎたが、カーロの尊厳もアンナのカーロへの尊敬の念も損なうことはなかった。

アンナとの再会は結果として、カーロに彼女への愛とそれをハリエットから貶められた心の痛みを吹っ切ることを可能にした。人間の存在の根本を支える愛を喪失することは、人生の総てへの執着を失わせることになる。カーロは鎮静剤を飲んで眠りこけ、命の潮が徐々に引いていき、人生への生き生きした反応をすることができなくなる自分を自覚する。独立していた時代の上質な生活へのこだわりが棄てきれなかった彼女も、今となっては、コーヒーを飲んだ情けないプラスチックのカップにこだわったことさえ不思議に思われ、彼女の内面では、人生のすべてが座礁して海岸に打ち上げられた難破船の残骸でしかなく、昔の恋人アレックスも、アンナも区別ができないほど一緒になってしまう。76歳とはいえ、批判的な独立した精神の持ち主であった一人の人間から、このように尊厳を失わせ敗残に追い込むのが、「双子ニレの木の家」の閉鎖空間である施設介護のなせる業であった。

州の調査官が調査に入っても、結果としては、スタンディッシュのような医療を必要とする者の介護を「双子ニレの木の家」へは入れないという、介護者にとっては仕事が軽減される決定がなされただけで、調査官の見た住空間の不潔さも、鎮静剤による介護も不問に付された。ハリエットは、自分より階級も上で教養もあるカーロの衰弱振りに、彼女に自分が勝利したと考えていたが、カーロの不屈の自己は生きていた。自分らしい死による自己主張として。

I want my death to be something more like me than slow integration. “Do not go gentle into that good night”... the words, so hackneyed by now, come back to me like a command from somewhere way down inside, where there is still fire, if only the fire of anger and disgust. (p. 121.)

上記中の引用は、マーガレット・ローレンスの『石の天使』のモットーとして小説に先立って掲げられたディラン・トマスの詩の一節。衰弱した臨終の父を励ますために書いた「お休みと言って優しくあの世へ行かないで」という息子からの愛情あふれる詩の冒頭の一行。人口に膾炙し過ぎて、既に陳腐な言葉であっても、この詩は、人生の最後の時まで強く闘い抜く高齢女性のどの物語にも不可欠であろう。原語で引用に続くのは、“Old age should

burn and rave at close of day; /Rage, rage against the dying of the light.” という、激しいアジテーション紛いの、かつて遅しかった父への、別れの言葉でもある。「老いの人よ、人生の最後に、燃えて叫んで、/光が消えるといけないから、怒って、怒ってと」。カーロにとっても同じく、死は単なるゆっくり進行する崩壊ではなく「もっと自分らしいもの」にしなくてはならない。まだ「怒りと嫌悪の火」が燃え残っている心の底から、そう命ずる声をするのだ。

実際の放火の手順は次第に整っていく。日常的な偶然が一つ一つカーロの意志によって必然へ変化する。リサの持ってきたろうそくの在りかについてハリエットは確認するが、カーロは隠し遂げる。好都合は、ハリエットの恋人ネッドが、ラクーンがひっくり返すので、ゴミ箱を毎夜、家の中へ運び入れることにしたことだ。ゴミ箱に火をつける予行演習に、夜キッチンまで行ってみる。カーテンにライターの液をかければ、早く燃え上がる。消火器が使えないようにできるかどうか確認する。消防車が駆けつけられないか、あるいは遅れて来るように、計画実行は大吹雪の日でなくてはならない。大雪の日は1月にしか来ないので、それまでカーロはもちこたえなければならぬ。行動派だった伯母、イザベラも、この犯罪的な行為を十分認めてくれると確信し、彼女の声を聞くような思いにとらわれる。

カーロは一大決心がつくと、不思議なことに、まったく新たな心境で死への準備ができるようになる。人間の世界のしがらみを超越して自由になった感じがしたのだ。11月末、秋の空の色彩は透明で美しく、モーツァルトのアダージョやフーガも純粋な音楽として聞こえ、浄化される思いであった。一方では、死の準備をしていると信じつつも未だにどうやってなすべきか迷いが多い。向上心の強い彼女は、今では知的な進歩など望むべくも無いことに、一層強い「大きな挫折感と怒り」を抱く。(訳, p. 144) 主体の自己実現の道は、紆余曲折がつきものだ。

年があげると、訪ねてきた牧師はカーロにここを出ることを提案する。もう遅すぎると申し出を断わるが、彼は彼女の意志を尊重する。疲弊しきった彼女は、ベッドに横たわったきりであるが、カーロはこれから実行に移す計画について、何も告げずにただ、信仰上の問題として彼に赦しを求める。“Can you forgive me now?” ソーンヒル牧師の答えは、「赦しを求める瞬間、われわれは赦されるのだとほくは信じます」であった。(訳, p. 150.) 自分の犯す行為を吟味する次元は自らの魂の救いにまで深まり、魂が永遠の救いを得ない墮地獄(“damnation”, p. 131) のリスクを犯そうとしていることを彼に告げる。牧師は、沈黙し、額に汗を浮かべるほど彼も苦しみながら、カーロの考えの真意を探り当てようとしていた。

カーロと牧師の魂の会話のような時がたつと、彼は「あなたは大した人ですよ、ミス・スペンサー」という。(訳 p. 151.) 彼は、カーロの絶えざる主体の確立のプロセスの証人であった。彼女が最悪のナーシングホームで、彼女の本当の怒りを勇気として、自己の本質を保ったことを見抜いて、心からの尊敬の念を示したのだった。

I [Thornhill] have seen in you what courage can be when there is no hope. I have seen the power of human being to withstand the very worst and not be corrupted, and not change. (p. 131.)

ベッドに横たわる76歳のカーロの姿からも、人間の真髄の発するオーラのような輝きを見て取る牧師は、“You are beautiful.”とカーロの人生の総決算の瞬間を高く評価した。彼は、彼女の人生の恥ずかしい面も総て曝け出しもするあの日記を託すに十分値する、信頼できる人物であったのだ。

少したった後日。悪寒がしたカーロはお風呂に入って、忘れた石鹸やタオルを部屋へ取りにいくと、ハリエットが彼女のベッドに座って、性懲りも無く再び、カーロの最後のノートを読んでいた。カーロの精神を尊重して、自分も苦しんだ牧師とはちがって、最後の決断をして心が張り詰めている彼女の心の中にまたもや土足で入り込んでくる。カーロのハリエットへの憤りは激しく、思わずハリエットが助けを呼ぶほど押し倒して、ハリエットはベッドから床へ転がり落ちる。ハリエットの無神経で懲りない、度重なるカーロの精神的内奥への侵害と虐待。これこそが、彼女の計画実行の時を決めるまさに引き金となった。外は雪がしきりに降り摘むその静かな夜こそ、待ちに待ったその時であった。

この世の時間にも関係がなくなるかのように、カーロは時計がない事に気づくが、少し仮眠をとって、皆が寝静まって静かになったら火による死を決行しようとする。最後に行なう重要なことは、自己の主体の軌跡を書き残した日記帳を耐火の冷蔵庫にしまうことであった。彼女の主体の確立は完結し、「双子ニレの木の家」、ハリエットとネッド、そして無辜の住人達も自分も焼き尽くしてしまっても、日記は変わらずに彼女の遺言として、まさに「死者の書」として残るのであった。カーロ自身、「いつの日か、これを読まれるかもしれないあなたのために、私は遺言（テストメント）としてこれを贈ります。どうぞ、わかかって下さい」と日記の最後を結んで、小説は終わる。（訳、p. 153.）

原文の英語の小説は、最初のニューイングランドの墓碑銘からのモットーと呼応するように、「あとがき」がついている。

この手稿は、「双子ニレの木の家」が火事で焼け落ちた後に発見された。表紙の中に入っていた手紙で、ミス・キャロライン・スペンサーは、ソーンヒル牧師に、できれば手稿を出版して欲しいと依頼していた。その願いは兄のジョン・スペンサーの許可を得て実現された。（筆者訳）

日本語への訳者は、これを省略されたのか、英語の原テキストに「あとがき」の付されていない版があるのか、筆者の不明を恥じるが、*As We Are Now* という日付の無い棄老日記、アメリカ版娼捨日記は、このあとがきが無くても、火事を起こすという衝撃的な行動によって、ヒロイン、カーロが、読者や社会へ向けて発信するメッセージを十分強く表明している。あとがきは、一見唐突の感も免れず、日記の重く深い訴えが、実際的な内容で削がれないわけでもない。しかし、ソーンヒル牧師とカーロとの最後の宗教的な神の赦しについての対話が、牧師によるカーロの日記の出版で応えられているという重要な点がはっきりして来る。

As We Are Now の本質的な意義は、1970年代のアメリカのナーシングホームの悲劇を教条主義的ではなく、惨状を体験した高齢女性のヒロインが、人生の最晩年まで全ったき一個の存在であり得たことを日記形式で描き出して、社会的に告発しその改革を促していることにある。また、1970年代のフェミニズムが不可視のままにした高齢女性の生き方

を、いち早く、若者の積極性に対し、老いは受身で消極的という神話も破るカーロの主体に結実させて、力強くクロスアップし得たサートンの功績は、老年学からも文学批評的にももっと高く評価されるべきではないだろうか。

注

- 1) May Sarton, *As We Are Now*, Norton, 1973, First published as a Norton paperback 1982, reissued 1992: 本稿では、以後、この作品に言及する時はこの版をテキストとする。本稿においては、このテキストの引用は、ページ数のみで表示する。武田尚子氏訳『今、かくあれども』東京、みすず書房、1995年第1刷、1997年第3刷: 訳の引用は、訳と明記して、ページ数を表示する。
- 2) Zoe Brennan, *The Older Woman in Recent Fiction* (MacFarland & Company, 2005), 1.
- 3) *The Other Within Us: Feminist Explorations of Women and Gender*, ed. Marilyn Pearsall, West view Press, 1997. Passim.
- 4) *Age Matters: Realigning Feminist Thinking*, ed. Toni Calasanti and Kathleen F. Selvin, Routledge, 2006.
- 5) *The Fountain of Age*, Simon & Schuster. 『老いの泉』, 上下, 山本博子 / 寺澤恵美子訳, 西村書店, 1995年。
- 6) *from Old Woman to older Women: Contemporary Culture and Women's Narratives*, (Ohio UP, 2003), xi.
- 7) "The Nursing Home Specter" in *The Fountain of Age*, 500-537. サートンが告発した1970年代のアメリカのナーシングホームの非人道的なケアについては、Bruce Vladeck, *Unloving Care: The Nursing Home Tragedy*, (Basic Books, 1980) を参照。
- 8) Chivers, Loc. cit.
- 9) Barbara Bair, "Fire and Ice: Constructions of Love, Death and Self in Sarton's *As We Are Now*." In *A Celebration for May Sarton*, selected and ed. Constance Hunting, (Howland's Printing Company, 1994), 220.
- 10) スタンディッシュのモデルは、サートンの他の作品にも顔を出す、ニューハンプシャーの彼女の庭作りのために活躍した気骨ある老庭師、パーリー・コールであることは夙に知られている。彼を、彼の子供たちが入れたナーシングホームへサートンが見舞い、そのあまりの惨状に悲憤を覚え、また、まるでカーロのような状況の女性を偶然、二回も見かけて、大きなショックを受けたことが、直接の執筆動機となって、*As We Are Now* をたった3ヶ月で書いたとサートン自身が Jane S. Bakerman とのインタビューで語っている。普通、小説には1年から3年の執筆期間を要するというのに。 *Conversations with May Sarton*, ed. Earl G. Ingersoll, (Mississippi UP, 1991), 23.
- 11) Janis P. Stout, "A Wordless Balm: Silent Communication in the Novels of May Sarton," *Essays in Literature*, Vol., 20, (1993): 310-323.
- 12) *From the Hearth to the Open Road: A Feminist Study of Aging in Contemporary Literature*, (Greenwood Press, 1990), 2. 岡田宏子, 「マーガレット・ローレンスの『石の天使』読解: 高齢女性のライフングスロマンとして」, 『椋山女学園大学研究論集』第38巻, 2007年, pp.115-132.

参考文献

1. Bakerman, Jane S. ““Kinds of Love”: Love and Friendship in Novels of May Sarton,” *Critique: Studies in Modern Fiction*, Vol.2. no. 2(1978): 83-91.
2. Defalco, Amelia ““And Then—”: Narrative Identity and Uncanny Aging in *The Stone Angel*,” *Canadian Literature: A Quarterly of Criticism and Review*, 2008(Autumn): 75-89.
3. Fulk, Mark K., *Understanding May Sarton* (South Carolina Up, 2001).
4. Henneberg, Sylvia, “Granny at Seventeen: May Sarton’s Early Encounters with the Land of Old Age,” *Tulsa Studies in Women’s Literature*, Vol.22. no. 2(Fall, 2003): 357-370.
5. Hoffman, Nancy Yanes, “Sartonia: Signposts and Destinations,” *Southwest Review*, Vol. 1, 2. 1977(Summer): 258-267.
6. Klien, Kathleen Gregory, “Aging and Dying in the Novels of May Sarton,” *Critique: Studies in Modern Fiction*, Vol. 24. no. 3(1983): 150-157.
7. Loughman, Celeste, “Novels of Senescence: A new Naturalism,” *The Gerontologist*, Vol. 17. no. 1. (1977): 79-84.
8. Peters, Margot, *May Sarton: A Biography* (Fawcett Columbine, N.Y., 1997).
9. Sarton, May *Collected Poems (1930-1993)*, W. W. Norton Company, 1993.
10. —, *After the Stroke: A Journal*, W. W. Norton Company, 1990.
11. —, *At Seventy*, W. W. Norton Company, 1984.
12. Springer, Marlene, “As We Shall Be: May Sarton and Aging,” *Frontiers: A Journal of Women Studies*, Vol. 5. no. 3(1980): 46-49.
13. Woodward, Kathleen, “May sarton and Fictions of Old Age,” *Women’s Literature*, Vol. 1. (1980): 108-127.
14. 安川悦子, 「「女性の神話」と「老いの神話」—ボーヴォワールとフリーダンのフェミニズムと反エイジズムの構造」, 『経済学論叢』(中央大学)第42第6号(2000年5月)1-22.
15. 『へるめす』(小特集 メイ・サートンの世界), 第49号, 1994年5月, 岩波書店

この小論を書くにあたり、2009年度椋山女学園大学振興会の研究奨励補助金に負うこと多大であることを感謝します。また、メイ・サートンの翻訳者、アメリカ在中の武田尚子さんに、サートンについて複数の訳書からはいうまでも無く、研究資料についてご指導頂いたことを厚く感謝します。